

2007年(平成19年)9月13日(木曜日)

スエズが水・環境部門を売却

仏ガス公社(GDF・ガス・デ・フランス)とスエズ社が2008年中に合併することが9月3日に発表された。

新会社名は「GDFスエズ」で時価総額約900億ユーロ(約14兆4千億円)、年間売上げが720億ユーロ(約11兆5200億円)の欧州第三位の巨大エネルギー企業の誕生である。新会社の社長にはスエズ社のメストラレ社長が就任する。

スエズ社は、水関係者ならよく知っている世界最大の水企業であり、全体売上げは5兆8千億円、水部門の売上げは1兆8千億円を超えている。このフランスを代表するスエズ社が、昨年イタリヤのエネルギー会社・エネルジから敵対買収をうけることになった。これに対して当時のドビ

ルバン首相が激怒し「経済的愛国主義、フランス企業を守れ」のスローガンを掲げスエズ買収を阻止する為に、国営の仏ガス公社との合併を主導。しかし、国営企業の仏ガス公社と民間企業スエズとの合併であり、その

世界最大の水企業誕生か、それとも…

労働問題や利益配分、支配権の確立等、多くの難問題が山積み合併は難航していた。今回の合併は、本年5月に就任したサルコジ大統領が、諸問題の解決を自ら先頭に立ち交渉した結果であった。問題は水・環境部門の取り扱いである。大統領選挙で争ったドビラン

は、ヴェオリア社のプレグリオ会長は「スエズの水・環境部門の買収に非常に興味がある、これを考えるのは私の義務である」とまで言い切っている。仮にヴェオリア社が買収に成功すると、世界最大の水企業が誕生することになる。

同時に仏電力公社や大手銀行のクレディ・アグリコル、貯金供託公庫(CDC)、原子力産業大手のアレバなどが名乗りを挙げている。仮に仏電力公社が買収すると、かつての独RWEのようなマルチインフラ企業を目指すのか、原子力産業のアレバが買収に成功すると、今世界で主流になっている「発電所と海水淡水化装置組み合わせ」プロジェクトで首位に立つとするのか、水関係者にとり、正式合併まで目が離せない状態が続くであろう。

(Y)